

二月六日に行われた愛知県知事選、名古屋市長選、名古屋市議会解散を問う住民投票の、名古屋「トリプル投票」は、選挙戦を仕掛けた河村たかし氏が市長選で約六十六万票を獲得、三つの戦いすべてで圧勝した。選挙はもちろん「民意」を反映した結果に違いない。だが、「トリプル」から見えてくるのは、日本の政治と世論の歪んだ姿である。

河村氏は公約に「市民税の一〇％減税」を掲げていたとはいえ、大勝した最大の要因は「議会たたき」という政治手法、だつたと言つていい。名古屋だけでなく、地方議会に対する住民の不満は各地で噴出している。議員は高い報酬を得ている割には普段の活動が見えない、行政に対するチェック機能を果たしているかどうか分からない、という不満である。

有権者は、こうした議会のあり方そのもの、とりわけ名古屋市議会では市長との対決が激化し市政運営が停滞していたので、「二元代表制」そのものとうんざりしていたのではないか。河村氏はこうした、市民意識の底流にある「既存の制度への不満」を巧みに吸い上げた。市議会を「悪役」に仕立てて、徹底的にこらしめる「痛快さ」を演出。「白か黒か」決着を迫ったことで、史上最多得票に達した。

むろん、地方政治の現実には善悪で括れるほど単純でなく、こうした選挙戦術には批判がつきまとう。かつて河村氏の同僚だつ

ヒーローに気をつけろ

た民主党の仙谷由人代表代行は「独裁的なやり方はヒトラーやナチスの手法だ」と河村氏を厳しく批判した。仙谷氏の指摘は正しい。だが、ヒトラー的な手法の登場を許したのは、ほかならぬ今の民主党政権の体たらくであることを忘れてはならない。

民主党が内政・外交とも場当たりのな政権運営を繰り返す中で、政権交代への期待は大きな失望に変わった。自民党には日本の未来を託せないから政権を去ってもらつたのに、今の民主党では山積する課題を何一つ解決できそうにない。国民の既存の政党への不信感は極まっている。そして閉塞感が強まれば強まるほど、人々は既成のものへの批判を強め、事態を「突破」できる、少なくともそういう錯覚を与えられるリーダーの登場を待望するようになる。

「河村ヒトラー」の登場は時間の問題だつたのだ。河村氏と似たタイプの政治家としては、橋下徹・大阪府知事がいる。二人とも対立構図をつくり、相手を叩くことで自らを浮揚させる。そのために大胆な、時に独善的な発言を繰り返す。

ただ、こうした政治手法は戦前のドイツまで行かずとも日本社会の時間を少しさかのぼれば、よく似た光景に出くわす。

一九九〇年代の前半にバブル経済が崩壊し、日本は「失われた十年」に突入した。自民党政権は低迷から脱却する有効な手段を講じられぬまま、連立政権の枠組みを変えたり、首相のたらい回しを繰り返し、

民心は次第に政治から離れていった。こうした閉塞状況の中、登場したのが小泉純一郎氏だつた。「ワンフレイズ・ポリティクス」が人々の心をつかみ、首相就任当初から圧倒的な支持を得た。二〇〇五年の衆院選では、郵政民営化への反対者を抵抗勢力と決めつけ、「刺客」をぶつけて自民党を圧勝に導いた。

だが、熱狂がもたらしたのは結局、格差と貧困が広がる荒んだ社会だつたのではないか。政治は芸能ショーまがいの見せ物と化し、政治家は深刻な問題を真剣に論じることより、見栄えや派手な言動に気を配るようになつたのではないか。自己責任と弱肉強食が礼賛される一方で、人と人とのつながりはズタズタに切り裂かれ、ついには「無縁社会」を到来させたのではないか。

とするなら、問題はこれから待ち受けている。早晩、河村・橋下流の限界は訪れる。そうなつた時、行き場を失つた「民意」は、さらに「強い」指導者を待望するだろう。敵を見いだして攻撃することで人心をおおる手法は、容易に排外主義と結びつく。近隣諸国への敵愾心をあおり、排外的な動きを扇動する「ヒーロー」が登場するのかもしれない。

こうした短絡的な政治ショーに対抗するには、支持と不支持を繰り返す乱高下の激しい「世論」から、熱狂を奪い冷静さを取り戻させねばならない。今必要なのは、忍耐強い思考と持続する志だ。

(木)